

子どもの行動に着目した保護者支援に関する研究

—ペアレント・プログラムとペアレント・トレーニングの連続受講による効果の検討—

○今村幸子

（鹿児島女子短期大学児童教育学科）

肥後祥治

（鹿児島大学教育学部）

KEY WORDS: 保護者支援 ペアレント・プログラム ペアレント・トレーニング

【目的】

発達障害者基本法の制定以来、障害の早期発見に加え、その保護者の支援が重要であることは周知されてきている。しかし、地域による専門家の数の格差等の問題により、本人及び保護者の支援には偏りが生じている。ペアレント・トレーニングは、保護者に行動分析の理論を用いた子育ての方法を伝え、実践しながらその内容を習得していくプログラムである。これは、保護者が支援者となり得るという点で、上述した支援の地域間格差を是正する 1 つの方法であると考えられる。

一方、ペアレント・プログラムは、アスペ・エルデの会によって提供されているプログラムであり、子どもについての肯定的な捉えを促すプログラムである。ペアレント・トレーニングにおいて実際に子どもの行動変容を図る際にも、子どもの姿をどのように捉えているかということが、取り組み内容に大きく影響する。そのことから、筆者はペアレント・プログラムとペアレント・トレーニングの連続受講について意義があると考えている。

本研究では、ペアレント・プログラムの受講経験のある保護者がペアレント・トレーニングを受講した場合の有効性について検討を行うことを目的とした。

【方法】

1. 参加者

ペアレント・プログラムの受講経験者の中で、子どもの行動上の問題を抱えていて、ペアレント・トレーニングを受講することを希望した保護者 3 名

2. 期間

X 年 9 月～X+1 年 2 月の間(新型コロナウイルス感染症対策による中断期間を含む)で、毎週実施。1 回のプログラムは 1 時間。

3. プログラムの内容

第 1 回	ホメ上手への道(確認)
第 2 回	行動を見るコツ
第 3 回	行動分析のイロハ + α
第 4 回	行動を育てる基本
第 5 回	行動を育てる知恵
第 6 回	ご褒美の極意!
第 7 回	行動を減らす反対側
第 8 回	役割に応じたコミュニケーション
フォローアップ	最近の我が家

4. 倫理的配慮

研究対象者には、研究の目的や結果の公開の可能性、個人情報保護等について口頭及び書面にて説明し、承諾を得ている。

【結果】

1. 行動分析についての知識獲得への影響

行動分析に関する知識獲得の指標として KBPAC 簡略版(志賀,1983)を用い、プログラム前後に回答してもらった。その平均点の変化について Fig.1 に示した。プログラム前後の平均点の差は +5.33 点であり、t 検定における有意差は見られなかったが、受講者全員に得点の上昇が見られた。

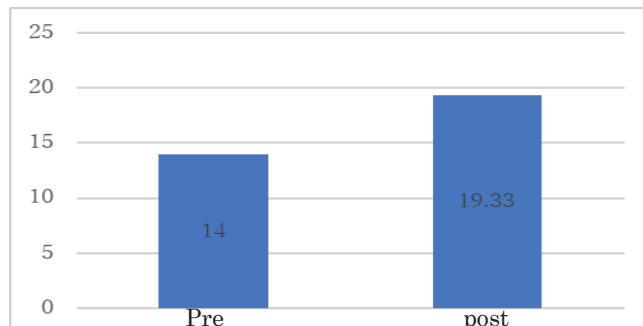


Fig.1 KBPAC の得点の変化

2. 抑うつ症状の有無と程度についての変化

抑うつ症状の有無と程度の指標として、BDI-II ベック抑うつ質問票を用いた。BDI-II ベック抑うつ質問票は、過去 2 週間の状態についての 21 問の質問によって抑うつ症状の重症度を評価する自記式質問調査票である。プログラム前後の得点の変化を Fig.2 に示した。得点の減少が確認できた参加者が 2 名、得点に上昇が見られた参加者が 1 名であった。

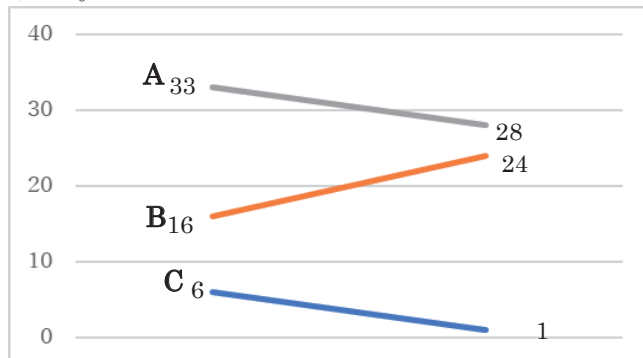


Fig.2 BDI-II の得点変化

【考察】

KBPAC の結果について、受講者の人数が少なかったことで有意差は見られなかったものと考えられるが、全員の得点上昇が見られるため、本プログラムにおいて行動分析的な考え方の習得ができたと考えられる。

抑うつの有無と程度について、得点の高かった受講者 A について、得点は高かったが、重度のうつ状態である 33 から中度のうつ状態である 28 までの改善は見られたためプログラムによる一定の良い影響があったと考える。得点の上昇が見られた受講者 B については、プログラムが就学先決定の時期と重なったことや他の受講者の子どもに比べて障害の程度が重度であり、課題の内容が異なったり、共感し合うことが難しかったりしたことが得点上昇に影響したと考えられるため、今後はグルーピングのあり方について検討する必要があると考える。

(文献)

肥後祥治(2020)行動分析ワークショップ「押してダメならひいてみな」テキスト

(IMAMURA Sachiko, HIGO Shoji)